わが亡きあとに洪水はきたれ！

ルポルタージュ 巨大企業と労働者

トヨタ自動車
新日本製鉄
石川島播磨重工
富士銀行
日産自動車
ソニー
日本鋼管
住友化学

齋藤茂男

総くるみ人間抹殺の体制は浮かび上がる。心優しき労働者たちは、いま……。

「人間尊重」を説くのは偽善だ。労働現場の実況検分をとおして、

その高いフェンスの向こうでは、人間圧殺の非情なドラマが

進行している。内で民主主義を破壊する企業が、外に対して

現代を支配する巨大企業。

発行 現代史出版会
取扱 書店

わが亡きあとに洪水はきたれ！

ルポルタージュ 巨大企業と労働者

齋藤茂男

さいとう・しげお

1928年東京に生まれる。慶大経済学部卒。1952年から共同通信記者。1958年警察による謀略事件「菅生事件」報道で取材班の一員として第一回日本ジャーナリスト会議（ＪＣＪ）賞受賞。1974年，連載記事『ああ繁栄』で再びＪＣＪ賞受賞。

《主な著書》『教育ってなんだ』（上，下）（太郎次郎社）『聖家族―おおハッピーライフ』（晩聲社）

書　名	ルポルタージュ<巨大企業と労働者> わが亡きあとに洪水はきたれ！
著　者	齋藤　茂男
装　幀	杉浦 康平+鈴木 一誌
第１刷	1974年11月10日
第13刷	1983年３月31日
発行者	徳間 康快
印刷所	ミツワ印刷
製本所	ナショナル製本
発　行	株式会社　現代史出版会　〒105 東京都港区新橋3―10―9　第５兼坂ビル　電話　431―2149
発　売	株式会社　徳間書店　〒105 東京都港区新橋4―10―1　電話　433―6231（代） 振替東京　4―44392

©1974 S. Saito

＊定価はカバーに表示してあります
乱丁落丁はおとりかえいたします

ISBN4-19-801966-5

ルポルタージュ

わが亡きあとに洪水はきたれ！〈巨大企業と労働者〉

目次

表題の「わが亡きあとに洪水はきたれ！（Après moi le déluge !）」は、ルイ一五世の寵妾ポンパドゥール侯夫人の言葉という。社交界の女王だった夫人は、一七四五年、ルイ一五世の目にとまり領地を与えられた。以後、大臣、将軍の任命や大使の引見をするなど、政務を独占。その華美な生活は国民の憤激をかったといわれる。

この言葉は、「宮廷で宴会やお祭り騒ぎばかりやっていると、フランスの国債がふえるばかりだ」との忠告を受けたときに言ったものと伝えられる。また、フランス軍がロスバックの戦いでドイツ軍に敗れたとき、ルイ一五世を慰めるために言ったものとも伝えられる。また、ルイ一五世自身の言葉という説もある。

のちに、カール・マルクスは『資本論』第三篇第八章（労働日）第五節でこの言葉を引き、

「わが亡きあとに洪水はきたれ！　これが、すべての資本家、すべての資本家国の標語なのである。だから、資本は、労働者の健康や寿命には、社会によって顧慮を強制されないかぎり、顧慮を払わないのである。肉体的および精神的な萎縮や早死にや過度労働の責め苦についての苦情にたいしては、資本は次のように答える。この苦しみはわれわれの楽しみ（利潤）をふやすのに、どうしてそれがわれわれを苦しめるというのか？　と。しかし、一般的に言って、これもまた個々の資本家の意志の善悪によることではない。自由競争が資本主義的生産の内在的な諸法則を個々の資本家にたいしては外的な強制法則として作用させるのである」

と書いている。なお、"Après moi le déluge !" は、「あとは野となれ山となれ！」と訳されている場合もある。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

Ⅰ〈石油・石油化学〉檻の中の労働者　9

1　人間砂漠　10

プリリングタワー／死の背景／石炭から石油へ／保安要員化／監視体制／大企業を見捨てた青年／新しい生きがい／ある変死／単調労働の反復／無表情な労働者

2　幻覚のコンビナート　27

無菌の城／支配の影／地域ぐるみの「合理化」／闘う老人

3　城下町を往く　36

〃領主〃住友／愛汗奉仕と融合調和／労働者管理の〃成果〃／あおる収益向上意識／地域浸透作戦

4　生体実験場　46

マル秘資料／マル生運動／プラントは墓場だ／あばかれる内幕

Ⅱ〈海運・港湾・造船〉世界第一位への航跡　53

1　終わりのない航海　54

京葉シーバース／巨大化するタンカー／官民一体の歴史／大井町コンテナ埠頭／Mゼロ船／雇用不安
2　この造船王国　64
ぼりばあ丸事件／「経済船型」と安全性／造船ニッポンを支える社外工／掛け合いコール／復活する「産業報国」／少数派の論理
Ⅲ〈自動車〉くたばれモダンタイムス　77
1　コンベアラインの闘い　78
トヨタが支配する町／行財政分室／地域管理の網の目／華麗なる工場／変形される音楽／一分二〇秒の勝敗／掠奪の仕掛け／集団蒸発事件
2　若者の群れ　92
もの言わぬ群衆／独身寮の青年たち／休むのも死ぬ思いよ／アブセンティズム／時計塔の神話／現代のモダンタイムス／「正しい組合活動」／共産党との攻防
3　資本の論理　105
朝の追浜工場／隔離病棟／リクルーター制度／組合は会社の労務だ／炭住街からきた青年／人的能力の「開発」／波乱の影／差別と監視の日々／おどし／暗黒故治／VT運動
4　暴力工場　118
厚木部品の従業員／人権侵害不当差別廃止請求訴訟／どこか間違っている／矢つぎ早の攻

撃／連続九日間のつるし上げ／アカとはつき合うな！／懐柔作戦／人間として／小さな支援／軟禁／殺気／『じゅんかつ油』を守る／それでも人間か！／まかり通る暴力／明厚会の結成／組合の本音／断じて許しえぬもの／問い直される繁栄

Ⅳ〈鉄鋼〉繁栄の詐術　145

1　素顔の労働者　149

蒸発する人妻／鉄鋼労働者の平均像／内職・共働き／安い賃金

2　「合理化」最前線　156

急成長の秘密／国の手厚い保護／アメリカ式労務管理の導入／ライン・アンド・スタッフ制／作業長制度／資格制度／過酷な昇格システム／モーレツごますり

3　生きがいを盗む　171

自主管理活動／QCノイローゼ／エリートの道／作られる満足感／ZD運動

4　四組三交替制のトリック　180

四組三交替制とは／朝の昼めし／管理される年休／人減らし

5　階層転位　188

民族大移動／IE手法による要員計画／配転の強要／下請け外注化／首切りレール／ケチで勝手で……／中高年層の悲哀／ワリに合わない作業長

6　安上がりの世界一　204
福山へ行く／自治体との癒着／鋼管族の城／部外秘資料が語る実態／インチキ無災害記録／労組もとりあげぬ労災／死を黙殺された労働者
7　右派の潮流　219
八百長選挙／灼熱に耐えて／右旋回の道程／鉄鋼連絡会議／思い思われる仲
V〈電機〉華麗なイメージの内幕　229
1　蝕まれる青春　230
頸肩腕症候群／疲労の源泉／肩へ走る痛み／生理休暇も返上して／労災を恐れる会社／配転拒否／ゼッケン胸に
2　隔離社会の少女たち　242
集団就職／千分の一ミリの世界／私がいけないのね／労務管理の〝達人〟／テレビも見られない娘たち／近乱どんす
3　四畳半工場群　253
工場嘱託という名のパート／一年目の老眼鏡／増大する主婦労働／下請けの構図／ソニー・スピリット
4　アカ退治　260
マンモス工場の中で／裁判闘争／会社の親衛隊／ニッセイににらまれたら……

5　〝平和と幸福〟の亀裂　266
七つの精神／BS活動／はじまった反撃
Ⅵ〈スーパーマーケット〉繋がれた娘たち　271
日々美しい努力を／触覚労働／一日二万一〇〇〇タッチ／ケイレンとしびれで眠れぬ夜／彼女たちの夢／使い捨てられる青春
Ⅶ〈銀行・保険〉疾走するホワイトカラー　281
1　365日のマーチ　282
微笑の内側／恐怖の瞬間／ノーミス運動／多い不安神経症／金融再編の号令／ラッキー・フライデー／不動産仲介業まで／なせば成る／打って一丸火の玉に／コンピューターの下僕／全速回転は続く
2　365日の狂騒曲　300
長総戦争／立ちん坊デモ／やらずブッたくり／年中無休社員／小脳化する労働者
Ⅷ〈運輸・農漁民〉裏街道の人びと　309
1　巨大な輸送工場　310
黒い巨獣／がむしゃらにやるだけさ／深夜の東名高速／歩合制がかりたてる／過積酷書／

生命をすり減らしても
2　奪われた海　318
敗残の漁師／やっぱり海がいい／背水の陣地／工場へかよう漁民たち／崩壊する〝むら〟／下へ下へといじめる組織／記憶の中の海／大義に殉じる思想／真の受益者
3　おそい春　332
地下一三メートルの職場／出稼ぎの長期経験者／出征兵士のほうがまだましだ／男衆のいない町／借金に追われて／まるごとの破壊
あとがき――取材を終えて――　345

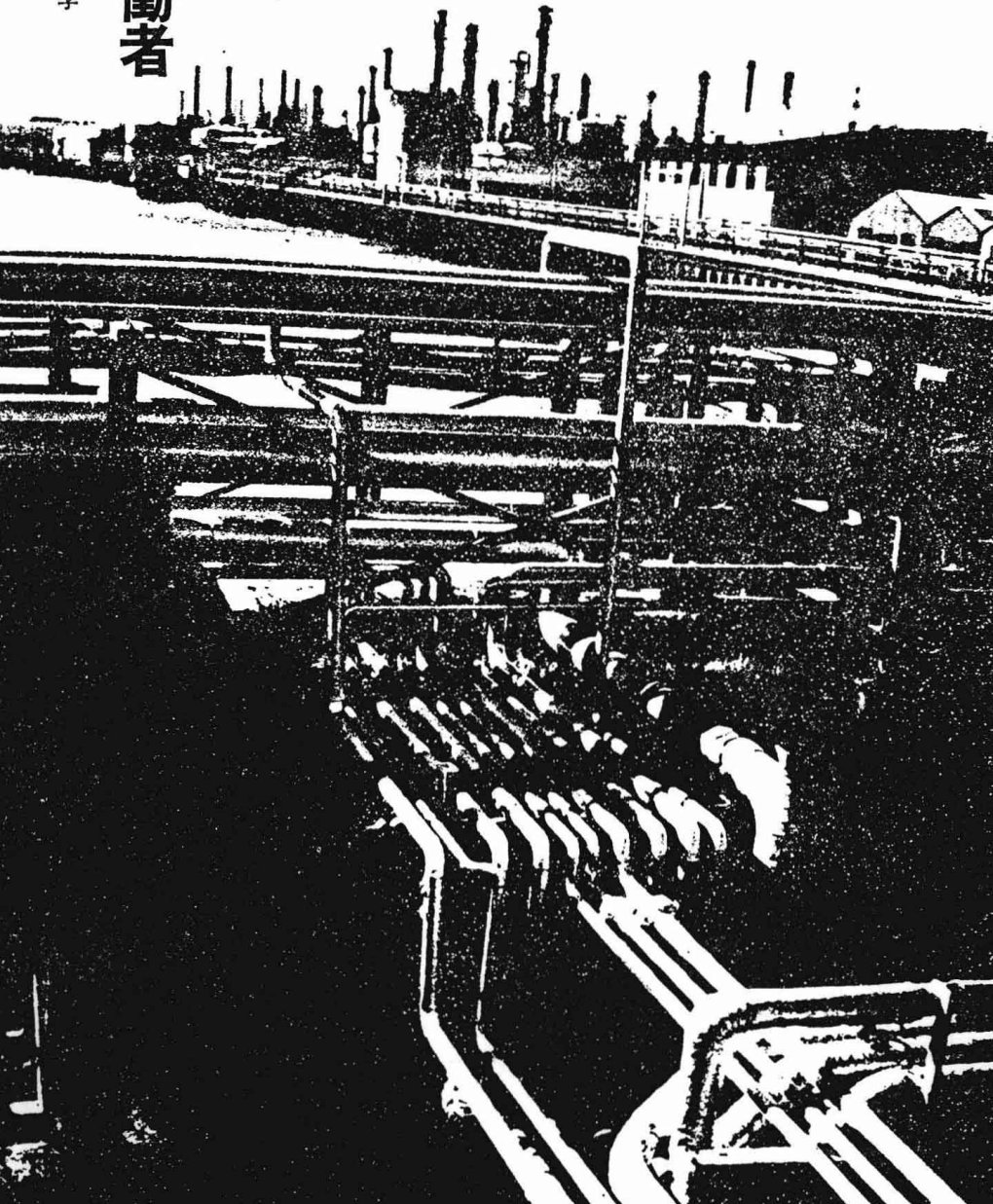
此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

I

石油・石油化学

檻の中の労働者

日本石油・日本ユニカー・三菱化成・
住友化学・日本ゼオン・日本石油化学



1　人間砂漠

プリリングタワー　一九七四年三月二六日。

この日、横浜市内は午前八時一五分ごろから小雨が断続的に降り続いた。東北東四―五メートルの風、気温五度。三月末にしては底冷えのする、鬱とうしい天気だった。

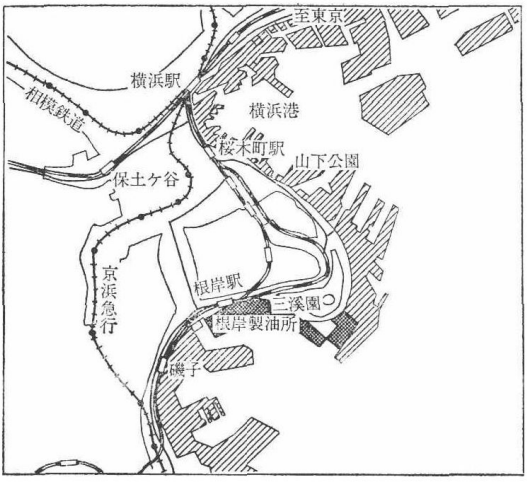
横浜市内を南へ走る国鉄根岸線は、海に突き当たる形で西へ大きくカーブを切る。そのあたり、線路北側はゴルフ場、学校、修道院などが点在する閑静な高級住宅地だが、南側は海に沿って東西に埋立地が広がり、真っ白い石油タンクと銀色のプラント群がびっしり並んでいる。石油会社の最大手、日本石油グループの心臓部に当たる日本石油精製根岸製油所だ。総面積は後楽園球場のざっと二〇〇倍、二二三万平方メートル（約六七万坪）、一日の原油処理能力五万二五〇〇キロリットル（三三万バーレル）、東洋最大のエネルギー基地である。

午後七時すぎ、構内の東端部にある同製油所第一本牧地区の中央制御室で、製油二課脱硫三係の労働者たちは、さっきからX係長の姿が見えないのが気になりはじめていた。X係長は午後六時ごろ、いつものように自転車に乗ってプラントの巡回に出かけていた。

石油精製の工程は、タンカーで運ばれてきた原油をまず常圧蒸溜装置（トッパー）に入れて加熱し、沸点の差によってナフサ溜分、灯油溜分、軽油溜分などに分類する。このあと、水素を利用して不純物を除去し、白金触媒による接触改質装置、調合装置を通して、LPG、ナフサ、ガソリン、ジェット燃料、灯

油、軽油、重油、アスファルトなどをつくるわけだが、その過程で出てくる硫黄を回収し、製品化するのが製油二課脱硫三係の仕事である。高温高圧の装置を扱うため危険度が高く、しかも担当区域が広いので忙しい職場でもある。作業員はほぼ二時間おきに各プラントを巡回し、装置が正常に稼動しているかどうかを点検することになっている。X係長は一日の仕事の締めくくりに、夕方、守備範囲のプラントを見回わってくるのが日課だった。

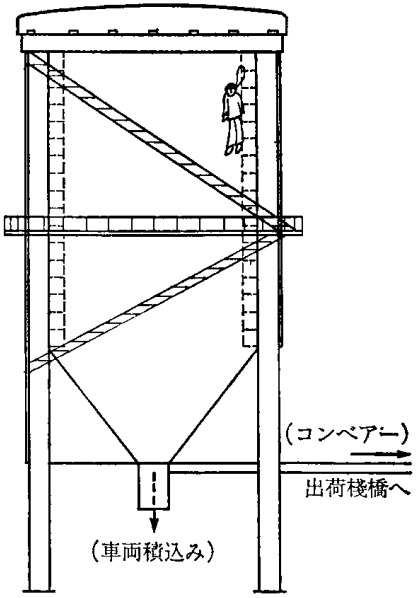
係長が一時間以上たっても戻ってこないのに気づいた労働者の一人は、ロッカーを調べてみた。もう巡回を終わって帰宅したのかもしれない、と思ったからだ。だが通勤用の上着やコートはそのままになっていた。どうしたのだろう、装置に異常でもあったのだろうか、それともガスを吸って身体の具合いが悪くなったのか。労働者の何人かが、構内を手わけして捜すことになった。



図I—1　根岸製油所付近略図

空調完備の制御室から一歩外へ出ると、寒さが一段と厳しくなっていた。夜になって勢いを増した雨まじりの風が、プラントの谷間をうなりをあげて駆け抜けて行く。黒い空間に、高い塔の灯がまたたいていた。制御室から東寄り、硫黄出荷桟橋の方向へ捜しに出た労働者の一人は、円筒状のプリリングタワー(硫黄造粒装置)のそばに、自転車が一台とめてあるのを見つけた。労働者たちが「サルファー(硫黄)瓶(びん)」と呼んでいるこの装置は、高さ一五メートル

くらい、脱硫工程を経て出た硫黄を回収し、粒状に変えるところだ。造粒された硫黄の一部はここからベルトコンベアで出荷桟橋へ、一部は、タワー下の取出口から車両で運び出すようになっている。タワーのそばに置かれた自転車の周囲に、人影はまったくなかった。不審に思った労働者は、装置の内部へ入って行った。内部には円筒状の壁に添って鉄梯子が垂直に最上端へ延びている。労働者はハンドランプの光芒を鉄梯子に添って上へはわせた。すると、光の輪の中に異様なものが浮かび上がった。係長が宙吊りになって死んでいたのである。係長は鉄梯子の上端へ作業用ロープをかけ、首を吊っていた。午後七時四〇分だった。



図I—2　係長が自殺したプリリングタワーの断面スケッチ

風雨はやがてみぞれまじりの雪に変わった。

死の背景

横浜山手警察署は検死の結果と、このあと係長のデスクから発見された遺書によって、自殺と断定した。遺書は会社の用箋に書かれた走り書き程度のもので、「職責に耐えられなくなった」という意味のことがしるされ、あて名は書いてなかったという。Xさんは当時三五歳。大卒で将来のエリートコースが保証され、しかも身重の夫人と幼い愛児がありながらなぜ死を選んだのだろうか。

職場でのX係長を知っている同僚、部下たちに聞くと、Xさんはもともと神経の細い内攻的な性格だったとだれもがいう。彼は根っからの日石精製の社員ではなく、日石グループの一つである日本石油化学か

ら七一年春、横すべりしてきた。はじめ品質管理部門に約一年いたあと、製油管理課計画第四係長になった。ここは生産に直接関係するラインではなく、生産に伴って必要になる各種の設備の設置計画などをする部門で、係長とはいっても部下は五人程度の小世帯だった。しかしXさんにとっては厳しい毎日だったようだ。

「そのころXさんはよく上司にどなられていましたね。まるで無能呼ばわり同然のことを部下の前でやられてごらんなさい、相当タフな人間でも参りますよ。たとえば本社と電話で打ち合わせをしたりしている最中に、〝キミ、そんな電話はどうでもいい、こっちへこい！〟なんて大声で怒鳴られたりするんですよ。日石化学が不況のときに外へ出された外様（とざま）でもあり、はじめて係長になったばかりのときに、自分の能力評価を露骨にやられたんだから神経的に参ったと思うな。この会社は能力査定にせよ、人事配置にせよ、人間味のないドライな体質がありますからねえ」

かつてXさんの近くで働いていた人はそう証言する。人事異動や配転のさい、個人の希望や生活設計を配慮したり、本人の納得のもとで人事を行なうといったことは、「期待してもムダですよ」ともその人は言う。

Xさんの場合も、製油管理課の係長になってから約一年半後の七三年秋、今度は生産現場である製油二課へ回わされた。はじめは脱硫三係の係長代理だったが、自殺する二ヵ月ほど前に係長に昇格、いままでと違って現場作業員約二五人を抱えることになった。Xさんは係長になる前、一ヵ月くらい病気で休んだことがあるが、このときすでにノイローゼ気味だったという。

「神経の疲れた人間が、生産ライン第一線の責任あるポストを当てがわれて、しかも部下が急に増えたらどうなるか、そこを考えてやるような人間らしさがないんだ」と労働者は憤慨するのである。別の労働者

が言う。

「オレたちも上司にベタベタしないからね。Xさんの係はどうか知らないが、たとえば係長が巡回用のバイク掃除してたってみんな知らん顔だ。そうかといって抵抗したり、団結して何か要求を通そうなんて、そういう連帯意識はまったくないね。何もしなくったって賃金は毎年上がるんだから、何も組合で闘争することもないじゃないか、という労働者が多い。なかには、上にゴマすってベタベタするのもいないこともないけど、概して冷たい関係というのかなあ。みんなバラバラ、時間内だけ勤めたら文句ないだろって感じなんだな」

そういう冷えびえとした人間関係の中で、Xさんは孤立感を強めたのかもしれない。

その冷たい環境を作っている背景にはどんな事情があるのだろうか。

石炭から石油へ　日本の石油産業は第二次大戦で手痛い打撃を受けた。生産設備の被害率は製造業で最高の五八パーセントに達し、敗戦直後の年間の原油処理能力は一二二万キロリットルに過ぎなかったといわれる。その後、一九四九年（昭和二四年）に来日したノーエル米占領軍軍事顧問によって「日本の既存製油所の復旧と、石油の製品輸入から原料輸入への切り替え」が勧告され、翌五〇年には技術導入や外国人による日本法人の株式取得の認可などを盛り込んだ外資法が制定されて、業界発展のきっかけが生まれる。

太平洋岸の製油所が次つぎと再開され、同時に国際石油資本と日本の石油会社との資本提携が急速に進んだ。カルテックス（米）と日本石油の折半出資による日本石油精製をはじめ、モービル（米）、エッソ（米）と東亜燃料工業、エッソとゼネラル石油精製、アングロサクソン（米）と昭和石油、ゲッティ（米）と三菱石油などがそれで、以後日本の石油各社は原料、技術、資本のあらゆる面で国際石油資本に首根っ子を

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com